

プロフェッショナル

宣言

齋藤孝

僕たちが

一流になるための

イニシエーション

通過儀礼

「新人」以上「中堅」未満の仕事に**変革**をもたらす

「**プロになる覚悟**」を鍛える!



プロフェッショナル宣言

齋藤孝

星海社

91



大学で教えている私は大学生や卒業生など20代の若者に多くの知り合いがいます。

卒業後も近況報告をしてくれる元教え子たちを通して、今の会社やビジネスの状況、オフィスの中の様子などいろいろわかって、大変興味深いのですが、同時に彼らの仕事の悩みもたくさん聞きます。

中でも「泣き言」が多いのは入社3年目くらいの若者たちです。

会社員生活にもだいたい慣れ、一通り仕事のやり方も覚えた頃です。入社1年ちよつとの新人はとにかく仕事についていくので精一杯ですが、3年目くらいになると周囲の状況を見渡す余裕も生まれ、同時に疑問や不満が噴出ふんしゅつしてくるのでしょう。

「仕事のやり方がとても非効率なのですが、提案しても聞いてくれません」

「ルーティンワークに明け暮れる毎日で将来への希望が持てません」

「会議の時間が長すぎて疲れます」

「上司からLINEで細々と仕事の指示がきてうっとうしいです」

などなど不満も具体的です。

恐らく全国津々浦々で多くの入社3年目あたりの社会人が、こんな感じで仕事や会社の愚痴を言っているのではないでしょうか。

さて、そんな悩める若者の皆さんに、私はどんなアドバイスをしているのでしょうか。それはシンプルなことです。

「いろいろ仕事で不満があるのはわかるけれど、君も社会に出て3年以上たつたのだから、そろそろプロフェッショナル宣言をしろなさい」

というものです。

「プロフェッショナル宣言」って何ですか？ といぶかしく思った方も多いでしょう。つまりプロフェッショナルを目指して、本格的に仕事に取り組むことを宣言するということです。

フランスの「人権宣言」やアメリカの「独立宣言」のように「私は今後、プロフェッショナルとして生きていく」ということを宣言するのです。

日本人はプロフェッショナルになることで精神的に安定して、幸せを感じることが出来る人が多い……と私は以前から思ってきました。

課せられた仕事に誠実に取り組み、驚くべき高いレベルでやりとげてしまう。

そんなプロフェッショナルになることで、周囲から「大した人だ」と認められ、自らも誇りを持ち、満足感を得て充実した人生を送ることが出来ます。

「職人気質」という言葉が日本にはあります。これは、自分の仕事に誇りをもってきちんとやるということです。

プロフェッショナルとして生きる——これは脈々と日本人に受け継がれているDNAではないかと思うのです。

ですから、幸せな人生を送りたいなら若い人たちにもぜひ、プロフェッショナルを目指してもらいたいんですね。

そして入社3年目あたり（正確には入社5年目くらいまででしょうか）は、プロフェッショナルを目指して本格的に「仕込み」を開始すべき段階にきています。

新人時代のウォーミングアップは終わり、プロフェッショナルになるためにさまざま

スキルや知識を身に付け、さまざまな経験を貪欲どんよくにしていくべき時期です。

だからこそ「今日から自分はプロフェッショナルだ！」と強く決意表明していただきたいのです。

昔の部族社会などでは大人になるための儀式ぎしきとして、若者たちにバンジージャンプであったり、火の上を歩いたり、暗い洞窟どうくつの中に降りていくといったことをさせます。ある種の苦行くぎょう的な試練しれんを乗り越えさせ、そこでようやく大人の仲間入りをするのです。

いわゆる「イニシエーション（通過儀礼）」ですね。

「プロフェッショナル宣言」では乗り越えなくてはならない試練はありませんが、それくらい強い決意をしていたいただきたいのです。

後々になって「私は○歳の時にプロになろうと志こころざしたのだ」と覚えていられるくらいはつきりした「区切り」が必要だと思えます。

私は25歳の頃、プロフェッショナル宣言をしました。

当時私は学者を目指し、大学院で研究生生活を送っていました。しかし周囲からは学生扱あつかいされず。

学部はとくに卒業し、プロの学者を目指しているのに学生扱いをされるのが、私はとも不満で、ある日から毎日スーツを着て大学院に行くようになったのです。

「私は仕事として論文を書いているのだ」と自分自身に、そして周囲に表明したわけですから、これが私の「プロフェッショナル宣言」でした。

もともと、すぐにプロの学者として認められたわけではありません。結局、10年近く大学院での生活が続いたという悲しい現実があったわけですが、その間も常に自分は「プロの学者なのだ」という意識をもって研究を続けていました。

スーツはその気持ちを表現していたわけですね。

別にスーツが好きだったわけではなく、スーツによってプロであることを宣言したかったのです。

このように皆さんも「プロフェッショナルを目指すんだ」と自分自身はつきり意識できるように宣言をしていたらいいと思います。

強い決意をもって宣言することによって、日々の仕事に対する取り組み方も変わってきます。

上司や先輩、同僚に向かって「プロフェッショナルとしてこれからは仕事を任せてもら

えるように頑張ります」と宣言するのもありだと思います。

「プロフェッショナル宣言をしたんだから、中途半端な仕事はするな！」ときつと周囲もあなたを叱咤^{しったげ}激励^{げき}してくれることでしょう。

宣言と共に何か象徴^{しょうちゆう}的なことをするのも良いですね。

たとえば、宣言と共に手帳に「プロフェッショナル宣言 ○年○月○日」と書いてみてはいかがでしょう。

手帳に書いて、「自分は宣言した」ということを強く意識するのです。

プロフェッショナルになるため何をすべきか、あるいは何をすべきではないかを書き出した「プロフェッショナルのルール」ノートを作っても良いでしょう。

さて、プロフェッショナルになるにはどのような心構えで仕事と向き合っていけば良いのかについては、本書で詳しく^{くわ}紹介していきます。

具体的にプロフェッショナルになるには、どんなことをしていけば良いのか。仕事を教えてくれるけれど、少々^{けむ}煙たい上司や先輩たちとどのようにつきあっていくべきなのか。仕事や会社がつらく感じる時はどうすべきか、そして、プロフェッショナルとしてどんな

キャリアを考えていくべきなのか。

かつてプロフェッショナル宣言をした年長者として、そして多くの若い社会人と接してきた者としてのアドバイスです。

ぜひ実践^{じっせん}して、周囲から一目おかれるような若きプロフェッショナルになってください。

そうそう、本書を読み終わったら「プロフェッショナル宣言」することをお忘れなく。

第1章 覚悟を決めてプロフェッショナルへの道を歩もう

プロフェッショナルになることが幸せの道 20

プロフェッショナルになるにはそれなりの覚悟が必要 22

プロフェッショナルの道を前に、心が定まらないのは何故か 24

今の20代は学生の頃から忙しかった？ 25

日本経済の停滞の中、職場環境もシビアに 26

IT化で仕事の量が増え、忙しくなった 28

いつの時代も大変 でも道は開ける 29

プロフェッショナルを目指すための心得

選択肢の多い社会に生まれ育ち、迷いが多い世代 32

『葉隠』^{はがくれ}で厳しい武士の世界に衝撃を受けてみよう 34

若者のポテンシャルは高い 唯一^{ゆいいつ}の弱点はメンタル 37

覚悟が定まっていない状態は疲れる 42

とにかく一つのこと「覚悟」を決めてみる 43

覚悟を決めるためにとことん考えよう 44

同年代と比べ合うのは意味がない 46

選択肢は一つしかなかった私 47

所属先があることは安心感を与えてくれる 49

もう一つの帰属先、家庭 50

仕事は最終的にセンスで決めよう 51

条件だけで仕事を選ぶと失敗する？ 53

合っていることは疲れない 55

好きか嫌いかより疲れるか疲れないかのほうが信用できる 57

私の大きな選択ミス 間違えたらやりなおせば良い 59

リスクを取る時はローリスク志向で 60

第3章 今は修行期間と考えてスキル、経験、センスを身に付けよう 63

今はプロフェッショナルを目指す修行期間だと思おう 64

ブラック企業で修行する必要はない 66

修行期間にはまず気の利かせ方を学ぼう 66

「気の利く部下」になると、居場所ができる 68

IT関連の「プロ」になって部内になじむ方法も 70

若者にはITのセンスが自然に備わっている 72

職人は日本人が最も安定できる働き方？ 73

職人さんのようにスキルは自力で身につけよう 74

先輩たちのやり方をひたすらコピーしよう 76

課題ノートを作ってスキルを学ぶ 77

ノートを使って修正力を身に付けよう 79

仕事では「私はこういう人間」という意識を捨てよう 82

得意でなくとも仕事はできる 84

苦手なことは早くすませる習慣を 86

社会、世間の理不尽さを学ぶ 87

理不尽さへの耐性をつけて凶太い神経を育てよう 88

経験を積極的にとりにいこう 89

業務とは直接関係なくてもなんでもやってみよう 91

経験⇨報酬という図式を作る 92

チャンスには即、手を挙げよう 93

0・3秒で手を挙げて、15秒で発言するトレーニングを 95

経験値を上げながらセンスの精度を高めよう 97

センスを早く磨くため経験を前倒ししよう 99

やりたくない業務を一生懸命やれるようになるには？ 101

第4章 仕事での人とのつきあい方、特に上司 103

仕事での基本的なコミュニケーション 104

上司はフィードバックを待っている 105

修行中はドリブルせずにパスを出せ 107

透明度の高い部下を目指そう 108

トラブルを報告できない若者のキモチ 109

上司に聞かれたことにはきちんと答えよう 110

進捗状況は区切って伝えよう 112

上司や先輩にどんどん相談しよう 113

職場の悩みも上司に相談をしよう 114

即決はしないかわりに対応は迅速に 115

自分で考えた上で、判断を仰ぐ 117

メールで誤解をなくすコミュニケーションを 119

電子メールは簡潔、明確に 120

異なる世代との「異文化間コミュニケーション力」を身に付けよう 122

まずは反応力（リアクション力）を鍛えよう 123

関西のおばちゃんをお手本にテンションを上げよう 125

行動でもリアクションをすると自分も楽しい 127

リアクションでコミュニケーションのストレスを減らす 128

仕事で求められる社会性とは雑談力のこと 129

雑談の目的は気の置けない関係性を作ること 131

雑談力はグローバル力に通じる 132

上司の言語表現は外国語だと思おう 134

出世は上司によって引き上げてもらうもの 135

第5章 **メンタルを強化して仕事に前向きになる** 139

- メンタル強化が若者の最優先課題 140
- 仕事と人格、感情を切り離そう 141
- 仕事の内容への評価と自分自身への評価は別 142
- 失敗を恐れずさまざまなことに挑戦 144
- 自律神経を安定させて、メンタルを丈夫に 145
- 意識して、仕事から完全に離れる時間を作る 147
- 呼吸法で心が穏やかに 148
- 呼吸で「今」のことに集中することで、不安が消える 150
- ストレスを受けやすい人は「浄化装置」を持つ 151
- 強力な癒やしの力がある海外ドラマ 152

ドラマで濃縮した時間を体験して、自らを癒やす 153

大切なのは自分がその世界に没入できるか 154

「ゆとり世代」批判は黙殺しよう 155

古典を読んで自信を育もう 156

孔子の言葉を引用してみよう 157

プロフェッショナルな精神力を養うなら偉人の本 158

福澤諭吉が勧める独立、自立 160

『孫子』でビジネスのやり方を学ぶ 162

常に古典や伝記の本を持ち歩いてみよう 164

第6章 仕事のキャリアは自分でプロデュースしていこう

165

将来のビジョンは「3年計画」で 166

自分で人生を設計していくという発想が大事 167

- 3年ごとに目標達成度をチェック 169
- 海外で働くこともキャリアの可能性として考えよう 170
- 海外で「修行」してみる 171
- 出世したほうが仕事は面白い 173
- 転職という選択肢を選ぶなら 175
- 「編入」的な転職を目指そう 177
- 名刺代わりになるような実績を作ろう 178
- 35歳までにそこそこの人材価値を 179
- 仕事でもセレンディピティを大事に 181

第1章

覚悟を決めて

プロフェッショナルへの

道を進もう

プロフェッショナルになることが幸せの道

日本は伝統的に「プロフェッショナル大国」だと思っています。

あらゆる職業において完璧かんぺきな仕事ぶりをみせるプロフェッショナルたちが大勢います。海外を旅行すると、接客業でもプロとはいえないような人が結構多いですね。愛想あいそが良くないのはさておき、店員同士でおしゃべりばかりしている、注文したものが全然出てこないといったことがごくごく普通に起こります。

そんなときに日本では高級店でもないごく普通のお店で、素晴らしいサービスが提供されているんだなとしみじみ思います。

新幹線では短時間に清掃員の方たちが完璧なまでに車内をきれいにしてしまふ。その見事な働きぶりに「すごいなあ。プロだな」と感心してしまいますね。

恐らく、清掃員の方たちも自身の仕事には自信と誇りを持っていらつしやると思います。そして定刻に発車した東海道新幹線に乗り、名古屋が近くなると「ただいま三河安城みかわあんじょう駅を定刻通りに通過いたしました」という放送が流れます。きつちりと定刻通り。多くのプロフェッショナルがいるから実現していることですね。淡々たんたんと放送しながら車掌しゃしょうさんも少し得意な感じがします。

このように仕事を責任もって完璧にやりとげることには強いこだわりをもっているプロフェッショナルが日本には実に多い。

これは何よりも働く自分にとって気持ちが良いことなのではないでしょうか。

プロであるということの内側からわき上がる自信と共に、アイデンティティ（存在証明）が確立^{かくりつ}して安心して生きていける。

つまり多くの日本人にとって、これまでプロフェッショナルになることが幸せの道だったのです。仕事を通じて収入だけでなく、誇りと満足感を得る。

別にある会社に就職したから認められるのではなく、仕事でプロとして認められてはじめてアイデンティティが確立するんですね。

会社員だけではなくフリーランスで仕事をしている方でも同様です。

私は仕事でスタイリストさんやフォトグラファーさんやADさんとお会いすることがよくあるのですが、見習いで師匠の手伝いをしていた人たちが一人前になっていく過程を見ることがあります。

見習いだった人がプロフェッショナルになった時というのは実にまぶしいです。

「ついに独り立ちして仕事が取れるようになりました」と報告してくれたスタイリストさ

んからは自信と誇りが立ち上っていました。プロフェッショナルとして認められ、表情が大人っぽくなり、風格ふうかくが出てくる。

若い人たちにはプロフェッショナルを目指して頑張っしてほしいと思う瞬間です。

プロフェッショナルになるにはそれなりの覚悟が必要

プロフェッショナルにはそうそう簡単にはなれません。

本気でスキルや経験を積みながら、なっていくものです。

相当強い決意をもって取り組んでいかなくはなりません。

ただ漫然まんぜんと働いていてもプロフェッショナルにはなれないのです。

あるテレビ番組での飲み会の席で、若いお天気キャスターが「説明を**してよく噛ん**でしま^かう」と悩みを告白しました。その時の女優の渡辺わたなべえりさんのアドバイスは今も強く心に残っています。

「噛んだら目の前で赤ちゃんが1人殺されると思いなさい。そうしたら絶対に噛まわな^いわよ」という渡辺さんは言ったのです。

「これぞ舞台女優」と思いましたね。

舞台上に立つ人は「噛んでしまったら赤ん坊が死ぬ」くらいの覚悟で演じているのです。「ちよつと噛んでしまいました。すみません（テヘペロ）」なんてことは全く許されない。

誰かが台詞を噛んでしまったり、忘れてしまったり、全体の空気が崩れてしまふ。だから絶対に噛んではいけない、忘れてはいけないという必死の思いで舞台上立つ。

渡辺さんは亡くなった中村勘三郎さんからこうした姿勢を学んだそうです。勘三郎さんは「死ぬ気でやれ」と常々おっしゃっていたそうで、舞台上立つプロフェッショナルの凄みを感じます。

仕事は異なっても、プロフェッショナルとはこうした覚悟を持って仕事に向かっている人たちです。

王貞治さんは「人間だからミスをするというのであれば、プロは人間であってはならない」とおっしゃっています。実際にはミスも起こるでしょう。しかし「人間だからミスをするのは当たり前だ」と言い訳をしないのがプロフェッショナルとしての矜持なのです。プロフェッショナルになるには、相当の覚悟を持たなくてはならないのです。

プロフェッショナルの道を前に、心が定まらないのは何故か

ところで今まさにプロフェッショナルを目指し本格的に仕事に取り組むべき入社3〜5年目くらいの人たちは、覚悟が決まっているでしょうか。

泣き言が多い人は覚悟不足と言えます。

「日々の仕事が忙しすぎて将来の目標が持てない」「先輩や上司との関係がうまくいかず仕事がつらい」「今の仕事は自分に合っているのか？ 転職すべきではないか」

どうも、「プロフェッショナルの入り口」を前に心が定まっていない印象を受けます。新人時代は終わったのに、まだ首がすわっていない状態でふらふらしています。

実は大卒の新卒社員の3割は3年以内に転職などで会社を辞めているとの統計があります。「プロフェッショナルの門」をくぐる前に最初の会社を辞めてしまった人たちですね。

転職自体が悪いわけではないのですが、仕事に本気で向かう構えがない場合は心配です。

本格的にプロフェッショナルへの道を歩む前の段階で、足踏みし、あれこれ悩んでいる。これは実にもつたいない状況です。

なぜ、入社3年目くらいの若者たちはプロフェッショナルへの道を前にして、心が定まらずふらふらしているのでしょうか。

多くの若い人たちが観察する中、そこには彼らが育ってきた時代背景や現在の職場の状況などが影響しているのではないかと思うようになりました。

ここで今の若者たちの現状分析をしたいと思います。

今の20代は学生の頃から忙しかった？

まず今の20代は実は学生の頃から忙しい日々を送っているのが特徴です。

昔に比べて親の懐具合も厳しいのでアルバイトをしなくてはならない学生がほとんどで、さらに奨学金という実質的な借金を抱えている学生もいます。そしてもちろん講義に出なくてはいけないし、その準備もある程度やらなければならないといけません。

アルバイトなどで忙しいのにもかかわらず、授業の出席率はとても高い。ものすごく真面目に講義を受けています。それがあるべき姿ではあるのですが、就職のことを考え、しつかり授業に出て良い成績をとっておかなくてはならない、というプレッシャーもあるのだと思います。

大学に入学した頃から、多くの学生は就職のことが頭の片隅にある状況です。このところ新卒の就職状況は悪くありませんが、労働力人口の約4割が非正規雇用という時代です。

から、就職できるかどうか不安を抱えざるをえません。企業は幅広く仕事をこなせる人材を求めています。

今の学生と比べると、一九八〇年代あたりまでの文系の大学生の多くはかなりいい加減な学生生活を送っていました。授業の出席率も低く、課題をこなしてくる率も低い。大学には来ないで、映画を観に行ったり、旅に出かけたり、あるいはサークル活動にのめり込んだりと、友達と遊んでいる時間が多かったですね。就職時には即戦力としては使えなくても、入社後2〜3年は実質的には研修期間のような感じで鍛え^{きた}上げられていく。そんな感じでした。それでも実際にうまく回っていたのです。

日本経済の停滞の中、職場環境もシビアに

同じ国とは思えないような状況の大きな違いの原因は、日本経済の状況が大きく変化してしまったことにあります。一九六〇年代、一九七〇年代、一九八〇年代は日本企業の景気が右肩上がりだったので、その分、会社にも体力がありました。給料も右肩上がり。新卒採用はポテンシャルを評価し、入社後に一人前に育て上げるものでした。

ところが、一九九〇年代前半のバブル崩壊以降はそんなことは言っていられなくなりま

した。さらに二〇〇八年のリーマンショックなどいろいろありまして、日本の企業の国際競争力は落ち、GDPでは中国に抜かれ、社員の給料は下がり、さらに正社員の数が減って非正規で働く人がどんどん増えていった。世帯収入も減り、子供の教育費にかけられるお金も減っていきました……。

今の大学生が忙しいのは、まさにこうした日本社会の変化によるものです。

そして就職に関しても昔とは大きく違ってしまいました。企業が新卒社員をしっかり教育するだけの体力がないのですね。しかもオフィスで働く人員もぎりぎりの数で回していますから、新人にもどんどん働いてもらわないといけない。昔の大学生とは違い、今は「即戦力」になる人が求められています。社会経験もないのに即戦力と言われても困ってしまいますね。とりあえず英語の勉強をしてTOEICのスコアを取ったり、IT関連のスキルを身に付けたりと、就職対策として大学生の間にやるいろいろな増えています。

こうしてなんとか入社した会社はというと、非常に忙しい状況です。

まず景気停滞の中、長らく新卒採用をしていなかった会社もあります。20代の上の先輩が30代、場合によっては40歳に手が届きそうな人が先輩といったこともあります。人員が足りない中、さまざまな仕事が若手に回ってきます。世代間ギャップも激しいですね。

一方、IT企業やベンチャー企業では若い人中心の職場で世代間ギャップはあまりありませんが、変化の激しい業界なので忙しさはさらに増しています。

IT化で仕事の量が増え、忙しくなった

こうした会社の状況に追い打ちをかけるように、IT化も忙しさに拍車はくしゃをかけています。本来は、IT化が進めば作業が効率的になり、仕事が楽になるはずだったのですが、事態は逆の方向に進んでいます。というのもITによって1人でできる仕事量が増えたため、まず人員が減らされてしまった。

人数が以前と変わらなければIT化で1人あたりの仕事は楽になったはずですが、結局昔は2〜3人でやっていた仕事を1人でこなすことになって、ひとりひとは忙しくなってしまうのですね。しかも若いうちは上から「やっておけ」と言われたことはなかなか断れません。

そのうえITによって、オフィスにいらなくても仕事ができるようになったことも負担となっています。仕事のファイルが共有され、パソコンとインターネットが使えればどこでも作業ができるようになってきていますし、電話やメール、SNSなどで同僚や上司、さ

らには取引先ともいつでも連絡がとれる状況です。「夜、上司からLINEで仕事の確認や指示がくる」とぼやいている卒業生もいましたが、これでは常に仕事に縛しばられている感じで疲れてしまっています。

そして高度経済成長の時代のような「これから豊かな時代がやってくる」といった期待感ありません。

若い世代のおかれている状況というものを見ていくと、大変だなと思います。社会の変化、そして労働環境の変化の中、仕事をするストレスは高度経済成長時代やバブル時代に比べ大きくなっているのだと思います。

いつの時代も大変 でも道は開ける

このように、ストレスの多い時代を生きる若い人たちに同情は感じますが、しかし今の時代が歴史上ものすごくつらい時代かといえはそういうわけでもありません。

時代が激動しているのは今に始まったことではありません。

日本の歴史を振り返っても幕末ばくまつ、明治維新は大激変の時代だし、大正から昭和前半も戦争に向かっていく厳しい時代でした。

戦後は戦後でまたがらりと変わって、もみくぢやな状況が続きました。ですから今はむしろ風なまの状態にあるともいえるのです。

今は格差社会で……と言われているわけですが、産業革命時代にはイギリスで石炭の採掘のために少年たちが悲惨ひびんな環境で働かされていました。昭和の頃は良かったといつても、労働環境は悪く夜遅くまで突貫とっかん工事をやっていて、そこでは出稼ぎ労働者がきつい労働を担になって働いていました。週休2日などは考えられませんでした。

振動を繰り返しながら徐々に良くなっていくというのが人類の歴史で、現代はいろいろな問題は起きていても、人類史上最も厳しい状況ではなくて、むしろ恵まれた環境にあるとはいえるのです。

不況ふきようとはいいつつ、日本は世界的に見るとまだ安定しています。これでもうっすら晴れている状態です。

というわけで今より大変な時代はいくつもありましたし、いつの時代もその時代なりの大変さ、しんどさがあったのです。

戦前は貧しい家の子供は上の学校に行かせてもらえず、親元を離はなれて奉公ほうこうにでるといったことも当たり前でした。そこで懇切丁寧こんせつていねいな職業指導を受けるなんてことはもちろんなく、

先輩たちから怒られながら必死で仕事を覚え、這い上がっていった人たちが大勢いるのですね。

かの松下幸之助は父親が商売に失敗したため、丁稚奉公から仕事をスタートさせています。子守やお店の掃除などの手伝いをしながら商人としての心得を学び、日々の生活の中で商売の才能を自ら育んでいっています。

「立志伝中の人と自分は違う」と思うかもしれませんが、厳しい労働条件でしかも未来の希望も見えないような環境の中でも、道を見つけていった人たちが有名無名を問わずいつの時代にも大勢いるのです。

私たちは自分が生きる時代を選ぶことはできません。自分に配られたカードを受け取ってそこでやっていくしかないのです。

「悪い時代に生まれたから」「会社の状況が悪いから」とネガティブな気持ちになっても何も良いことはありません。むしろ、先人たちにならって、自分を育てていこうという意志を持つことで希望が生まれてくるのです。

選択肢の多い社会に生まれ育ち、迷いが多い世代

若い世代がおかれた社会の状況に加えて、今の若い世代の大きな特徴は、選択肢がたくさん用意されているのが普通の状態の中で生まれ育ってきたことです。

なにせコーヒー一つ注文するのにもいくつもの種類があるし、最後はマグカップか紙コップかも選べるしといった具合。商品やサービス、そして機会が豊富にある日々の生活は選択の連続です。恵まれた社会ですが、選択することに疲れ、何かを選んだ後も「本当にこれを選んで良いのか」という不安を感じさせられる社会でもあります。

常に多くの選択肢に囲まれている——このことが、仕事において若者たちの悩みや迷いを増やしています。

若い人の話を聞いていると「何かを選択する」ということが「他の可能性を捨てる」ところに感じられてしまうようですね。選択した後で「本当にこれでよかったのか」「これが私にとって最良の選択だったのか」と常に迷っています。

たくさん選択肢があるけれど、どれが本当の正解なのかがわからないのです。

私のイメージとしては、今の若い世代は「壁を前にして僕らはいつも迷っている」といった歌詞の歌ばかりを聴いて育ってきたという感じなのです。

日本の労働環境も今の50代が社会に出た頃とは大きく変わりました。当時は終身雇用の時代で、高校や大学を出て就職したところでほぼ定年まで働くのが多数派でした。それに比べると今は、終身雇用がほぼ崩れて、転職も普通に行われることになりました。

よくも悪くも仕事やキャリアの選択肢がたくさんある時代です。

会社や仕事に不満があれば、自分に合ったところを探せば良いですが、一方で、今働いている会社にずっといられるかはわかりません。仕事の選択肢は豊富になりましたが、その分、雇用が不安定であるのが今の状況ですね。

そんな中、若い人は「この会社で良いのか」「この仕事でずっとやっていけるのか」「もっと自分に合った仕事があるのでは」と自分探しの旅を続けながら、日々迷っているのではないのでしょうか。中には「より自分らしい仕事」を求めてふわふわと転職を繰り返してしまう人もいます。

こうした状況ではなかなか仕事と真摯しんしに向き合うことができませんし、仕事の面白みや楽しさもなかなか感じる事ができません

若い人に必要なのは、職業の多様な選択肢の中から一つをなんとかを選ぶことです。可能性の多さにおぼれず、自分に合ったものを選び取っていく力です。簡単なことではない

でしょう。しかしこれは、選択肢の多い時代に生まれ育った人が身に付けなくてはならない能力です。

『葉隠』で厳しい武士の世界に衝撃を受けてみよう

迷いが多くて、なかなか「プロフェッショナル」の道に踏み出せない若い人たちに、一種のショック療法としてお勧めしたいのが『葉隠』という本です。

江戸中期に武士の心得としてまとめられたもので、鍋島藩士山本常朝の言葉を口述したものです。ここで示される武士の世界の苛烈さには圧倒されます。

たとえば武家の娘が駆け落ちをしてしまう。その責任を問われて親兄弟が切腹することになるといったエピソードが出てきます。家に役人がきて「こういうわけだから」と切腹を命じる。家の者たちは碁を打っているところで「じゃあ、この碁の勝負を見届けてからにしてくれ」などと悠長に答えて対局を続ける。

いよいよ碁を打ち終わると「では」ということで切腹するのです。それにあわせて、家来たちも10数人切腹するんです。

家来たちまで切腹しなくても、と考える役人に対して「この者たちは覚悟を決めた者た

ちでござる」と言っています。

ええ〜？ という感じですよ。娘1人が駆け落ちしただけで、大変なことになってしまふ。立派な武士たちが十数人切腹して、それを「覚悟が決まっている」とする。

『葉隠』は武士の奉公について書いた本といえます。そして武士は長らく「超ブラック」な仕事であったのです。ちよつと失敗すれば切腹、不祥事ふしやうじがあれば切腹。上に逆らうことももちろんできないし、上下の身分もほとんど決まっている。

この超ブラックな状況と比べたら、現代は天国ですね。仕事で失敗したからといって、切腹しろとは言われないのですから。

極端すぎる例ですが、まあ、歴史上にはこのように想像を超えるような苛酷かこくな中を生きていった人たちがいっぱいいるわけです。

この本が書かれた江戸中期は戦国時代から続いた戦乱も昔の話となつて、平和な時期に入っていました。武士の厳しい規律も少し緩ゆるくなってきていた頃に、「武士はこうあるべきだ」とカツを入れた書ともいえるでしょう。なにせ常朝は「最近の若い武士は首を切ったこともない」なんて文句を言っています。江戸時代になって平和なのだから、そうそう首を切るなんてことはないのが当然なのですが、常朝としては「最近の武士は覚悟が足りな

い」と感じていたのでしょうか。

ところで超ブラックな環境の中で、当時の武士たちはどのようにして生き残ろうとしたのでしょうか。いえいえ、生き残ることなど考えていないのです。『葉隠』では、「武士道というは死ぬことと見つけたら」と言っています。生き残ることははなから考えず、死ぬことを考えよと言っているのです。

では当時の武士は強いストレスを感じて、絶望的な思いで日々を送っていたのでしょうか？ 私は当時の武士は案外淡々と生きていたのではないかと思えます。

「暮の勝負をつけてから切腹」というのはちよつと芝居がかっていますが、この武士たち、神経がとて太いですよね。

生きよう生きよう考えるから、ほんのう煩惱も生まれてつらい。死ぬことを考えていれば迷わないで生きていけると常朝は説いたのですが、ここにはある種の真実が含まれていると思います。

「まず死ぬことを考える」。私は『葉隠』からつらい状況を生き抜く神経を学んだ気がします。死ぬことを覚悟して、あとはあまりいろいろな考えない。

「覚悟を決めてあまりいろいろ考えない」というのは現代にも参考になる生き方だと私は

思います。

『葉隠』は現代とは常識が全く異なる書ではあるのですが、読む価値があります。あの時代に比べたら今は天国のようだと、ちよつとほつとしながら、『葉隠』の時代の人たちのように、少々神経太く、一つのことに関心するに決めたならあまりよくよ考えないで生きていく。これは一つの知恵ではないでしょうか。

こうした生き方は仕事においても十分に参考になります。

会社での人間関係、今の仕事への不満、将来への不満。もっと良い会社への転職……考えれば考えるほど悩みはどんどん生まれてきます。そこで、考えることをあえて止めましょう。

若者のポテンシャルは高い 唯一の弱点はメンタル

迷いが多い、心が定まっていなくて、親心から若干小言めいたことを書きましたが、私は今の若い世代を高く評価しています。

今入社3年目前後にあたる人の多くは、いわゆる「ゆとり教育」を受けた世代です。世間からは「ゆとり世代はダメだ」といった根拠のない評価を受けてきました。そして彼ら

自身も「ゆとりなので……」とコンプレックスを持っています。そのことも彼らにストレスを与えてきたと思います。

しかし大学で多くのゆとり世代を教えてきた私は、この世代に大きなポテンシャルを感じています。まず非常に「素直」なのが、若い世代の良いところですよ。

面倒な課題を出しても一生懸命取り組んで、レベルの高いものを完成させてきます。人のアドバイスも素直に聞きます。

就職を控えた学生に「話す時はこのように」と助言したらその通りに実行して内定が出るなど、素直さが大きなパワーとなっているところがあります。

文章力も高いですね。これはITの発達の影響かもしれないませんが、今の人たちはブログだったりSNSだったりさまざまメディアで昔より文章を書くことが多い。そのせいか日本人全体の文章力が高くなっています。

昔の日本人より今の日本人のほうがコメントは上手ですね。特にITを使いこなしている若い世代はコメント力が高い。ヤフーニュースやアマゾンなどで一般の購読者が寄せた感想は非常に読み応えがあるものが多いですね。「一般の人が書いたコメントなのか！」と唸^{うな}ることもよくあります。

さまざまなことをこなすマルチな対応力も高い。会社でも前の世代よりよっぽど幅広い仕事をこなせます。

その上、礼儀正しくマナーも良い。

ただ、この有能な若い世代の最大の弱点がメンタルです。

感性がするどく繊細せんさいな人が多いのでしょうか。ちよつとしたことで心理的にダメージを受けてしまう。傷つきやすい。

コミュニケーションもちよつと苦手です。感じよく接することはできませんが、相手と戦つてこちらの言い分を通すといったことは苦手ですし、人間関係にストレスを感じやすい。こうしたメンタルの弱さが仕事では不利に働いて、損をしている面があります。

上司のちよつとした叱責しっせきや注意にも深く傷ついてしまったり、失敗を恐れて仕事に積極的に関わろうとしないため、伸び悩んでしまうケースもあります。また職場の人間関係にものすごくストレスを感じ、仕事をうまく回していけなかったり、極端な場合は会社を辞めてしまう人もいます。

しかしメンタル面は考え方や物の見方、日々の行動を少し変えるだけでも強くしていくことができます。職場の人たちとのコミュニケーションも、ちよつとしたことでスムーズ

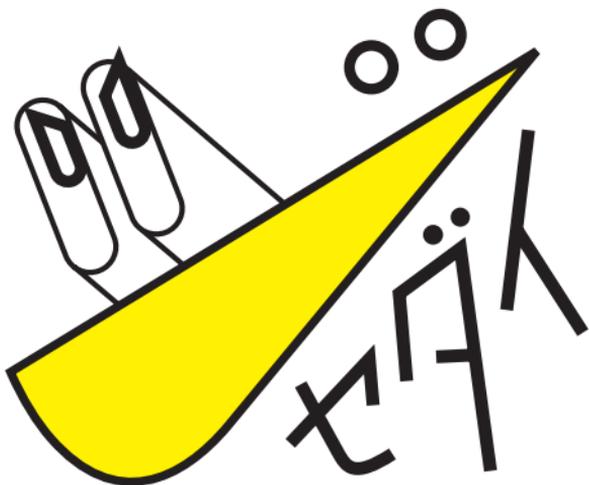
にしていくことができます。

詳しくは2章以降を読んでいただくとして、メンタル面を強化し、迷いを減らしていくことで、仕事に前向きに関わっていただけるようになります。

そして、この世代の本来の素直さが生かされれば、仕事のスキルもぐんぐん伸びていくはずです。上司や先輩たちからも信頼され、なにより自分自身が仕事の面白さを感じ、やりがいを感じるようになるでしょう。

さあ、覚悟を決めて、プロフェッショナルへの道をスタートさせましょう。

君は、



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!